

千葉市職員による災害派遣活動レポート

今回の東日本大震災にあたっては、千葉市からも岩手県や宮城県といった東北地方の被災地に、交代で職員を派遣し様々な支援を進めています。以下は、活動を終えて帰任した職員の活動レポートです。

緊急消防援助隊第二次千葉県隊活動

千葉県隊長

千葉市中央消防署 副署長 おお なぎ 大 極 隆

千葉市消防局部隊7隊26名は、3月17日10時00分に事前集結場所の東関東自動車道市川パーキングエリアで千葉県下10消防本部・28部隊・104名の隊員編成を以て緊急消防援助隊千葉県部隊を結団し、3月17日から21日までの間、岩手県陸前高田市へ二次派遣隊として応援出動し、一次派遣隊の任務を引き継ぎ、救助、捜索活動を中心として活動してまいりました。

被災地では、地元の方々に勇気と希望を与えるべく、必死の救助活動に取り組んでまいりましたが、捜索場所には、アルバム、ぬいぐるみ、茶碗などが散乱し、生活していた証しはあるものの生存者は発見できない。一つの町が消えるという言葉では伝えられない惨状を目の当たりにし、残念ながら生存者の救助には至りませんでした。

しかしながら、御遺体ではありますが、32名の方を救出し御家族に届けられたことは、各隊員の一人でも多くの人を助け出すという強固な気持で活動に臨んだ賜物と自負しております。

この他の活動として避難所から妊婦さんの搬送を含めた救急搬送6件で活動を終了し、3月20日の24時00分に三次派遣隊に活動等の任務を引継ぎ、21日の11時45分全隊無事帰任しました。

なお、平成23年4月12日現在、県下24本部から緊急消防援助隊として、延べ231隊・773名（内千葉市消防局54隊・197名）の職員が派遣されております。

最後に、このたびの東日本大震災によりお亡くなりになられた方々のご冥福と、被災地の早い復興を心からお祈り申し上げます。

※ 緊急消防援助隊

1995年1月に発生した阪神・淡路大震災を契機として発足。被災地の消防力のみでは対応困難な大規模・特殊な災害の発生に際して、消防庁長官の出動要請を受け出動し、被災地で災害活動を行う。都道府県単位の部隊編成となり、第二次派遣隊において千葉市消防局は、県内部隊を統括する千葉県隊指揮隊を含む7隊26名を派遣した。



花見川区役所保健福祉センター健康課

主任保健師 伊藤 智重子

千葉市では、3月23日から一週間交代で岩手県大槌町で保健活動をしています。わたしたち第2班は、3月28日から4月3日までの7日間でした。約170名が避難している小学校を拠点に、計4か所の避難所約300名の健康管理が主な業務です。避難所を巡回して血圧測定や健康相談を行い、近隣の在宅被災者には家庭訪問も行いました。病院は機能しておらず、持病の薬も流されてしまっています。医療が必要な方は、大阪府立病院の医療チームと連携を取り、診察や薬の処方を受けました。

また、どの方も津波に対する恐怖や家や家族を失った悲しみ、将来の不安を抱えていました。いつでも相談できる雰囲気をつくり、話したいときはゆっくりと話を伺いました。不眠などの症状がある方は、神奈川県こころのケアチームの巡回診療につなげました。インフルエンザや嘔吐下痢症などが流行する恐れもありましたが、トイレなど共用スペースの整備を行ったり、アルコール消毒を呼びかけたりして、感染予防に努めました。

わたしたちは保健師2名と事務職員1名のチームとして、大槌町から車で40分の釜石保健所で寝泊りし、非常食を携帯しながら瓦礫の中を車や徒歩で移動しての活動でした。余震も頻繁にあり、自分たちの健康管理や安全確保も必要でした。事務職員が情報収集、車の運転、ガソリンの調達、食事の準備、事務局への連絡などを担うことで、保健師が相談や訪問等の活動に専念することができました。



市民局市民部市民総務課

係長 三橋 正明

私は、3月23日（水）～29日（火）の間、被災地の中でも被害の大きかった岩手県大槌町（吉里吉里地区）に行ってまいりました。千葉市からは、片道約700キロの道のりです。

今回の派遣は、保健師による被災者の健康管理等を目的としていましたが、事務職の私は、裏方として、本市等との連絡調整、避難所への車の運転、家庭訪問時の同行などを担当しました。

現地では、釜石保健所に寝泊まりし、30キロほど離れた大槌町まで、毎日、車で通いましたが、途中の海沿いの町はどこも、津波でひどい被害を受けており、その光景に心が痛むとともに、連日続く余震のため、いつまた津波が来るかもしれないという常に緊張を伴う移動となりました。

被災者の方は、断水、停電、食料・燃料等物資の不足、また連日の強い余震など、つらい避難生活をしいられておられました。そのような中、自身も被災者でありながら、地震発生の日から、寝食を忘れ献身的に、避難所での救護にあたられている現地の看護スタッフの皆さんには、本当に頭が下がる思いがいたしました。

現在、千葉市に戻り、毎日お風呂に入り、暖かい布団に眠り、蛇口をひねれば、水が出る生活に戻りましたが、派遣前は当たり前と思っていたこれらのことが、本当にありがたいことと感じられ、また、依然として不自由な避難生活を余儀なくされている被災者の方々には、本当に申し訳なく思います。

心より、被災地の一刻も早い復興を願っております。

